二〇二五年度　洛星中学校入学試験　（国語）【前期日程】

※　問題は冊子形式で、全部で17ページあります。

※　解答用紙は問題冊子の中にはさんであります。

※　解答は欄（らん）をはみ出して書いてはいけません。

【一】　次の文章は、『君たちはどう生きるか』（吉野 源三郎 著）の一部です。よく読んで、後の問いに答えなさい。なお、設問の都合上、一部文章を改変しています。

《本文までのあらすじ》
本田 潤一（コペル君）は、戦前の中学校一年生です。雪の降り積もったある日、同級生で友人の北見、水谷、浦川らと雪合戦をしていた際、コペル君を除いた三人が上級生の黒川とその仲間から暴力を振るわれましたが、コペル君は隠れて見ていることしかできませんでした。帰宅後、コペル君は熱を出し、その翌日から学校を休んでいます。

コペル君は、たいへん無口になって来ました。黙って考えこんでいる時が多くなりました。いつもは、病気をしても、少しよくなると、Ⓐ現金に元気になるコペル君でした。コペル君が病気になると、お母さんは、病気にさしつかえない限り、たいていのことは、コペル君のいうとおりにして下さいます。コペル君は、その病人の特権を大いに振りまわして、いろいろな註文をいい出すのがおきまりでした。それだのに、今度ばかりは、お母さんの方から、おひるはオムレツにしてあげようかと言っても、ロシヤ菓子を取って来てあげようかと言っても、何か読みたい本はないのときいても、コペル君は、ただもの憂そうな返事をするばかりです。そして、お母さんが、コペル君の気を引き立てようとして、あんまりいろいろ話しかけると、しまいには、

「少し黙っていて……」

と、不機嫌な顔をして寝がえりを打ち、お母さんの方に背中を向けてしまいます。で、お母さんは、①心配そうに眉をひそめ、なぜかとたずねたいのを我慢して、そっと立ってゆくのでした。そんなとき、お母さんが軽くホッと溜息をつくのが聞えると、コペル君は、②お母さんに背中を向けたまま、ポロポロと涙をこぼしました。

今度のことは、コペル君にとっては、本当に大きな出来事でした。こんなにまで心をゆすぶられたことは、今までにありませ

んでした。お父さんがなくなったときにも、コペル君は寂しくって、悲しくって、よく泣きましたが、でもあのときには、自分についての悔恨に責められることはありませんでした。悲しみに身をまかせていれば、まだ救われました。しかし、今度は、後悔しても取りかえしがつかない思いに、くりかえし苦しめられるのです。夜中にふと眠がさめて、そのまま眠られないことも、一度や二度ではありません。

――コペル君は、自分の行いや考えをしみじみと思いかえし、しっかりと見つめることを、はじめて知ったのでした。

こういう日が何日かつづきました。

コペル君の心持は、いつの間にか、しんみりとして来ました。

どんなに人前を取りつくろって見ても、自分が友だちを裏切ったという事実は、もう、少しだって変わりません。それは、どこまでもコペル君につきまとって、コペル君の良心をじっと見つめています。コペル君は、もう言訳を考えなくなりました。ただ、自分のしたことが、しみじみと悲しまれて、北見君や水谷君や浦川君に対し、本当に済まなかったという気がして来ました。そして、あの三人に向かって、「僕が悪かった。」と素直にあやまりたい心持が動いて来ました。でも、ただあやまっただけで、はたして三人は、コペル君を許してくれるでしょうか。コペル君自身が自分の卑怯を認めれば、三人はなおさらコペル君に、愛想をつかしてしまいはしないでしょうか。――それを思うと、③コペル君の心はやっぱり迷わずにいられないのでした。

日曜日の午前でした。

病室の障子に明るく日がさして、火鉢にかけた鉄瓶が、しきりに湯のたぎる音をたてています。

コペル君のわきには、叔父さんが寝ころんで、黙って新聞を読んでいました。

コペル君は、仰向きに寝て、もうそろそろいらなくなった氷嚢を、ブランコのようにゆすっていました。氷嚢釣りにグニャリとブラ下った生温かい氷嚢が、ゆれては戻り、ゆれては戻りするのを、ピストンのように押してやりながら、コペル君は、全

15　20　25　30

く別なことを考えつづけていました――

「いおうか、いうまいか……」

いうとすれば、叔父さんとたった二人きりの今が、ちょうどいい機会でした。長い間、迷っていましたが、コペル君は、とうとう口を切りました。

「あのねえ、叔父さん。」

「なんだい。」

叔父さんは、相変わらず新聞から眼を離(はな)しません。

「僕ね、――」

「うん。」

「僕……」

といいかけて、コペル君は、後がつづかなくなりました。思い切って叔父さんにいってしまおうと思ったのに、いざとなると、やっぱり言い出しにくいのです。でも、押し切るようにしていいました。

「僕、学校にゆきたくないんだ。」

叔父さんは、その思いつめた調子にびっくりして、新聞から眼を離しました。

「どうしたんだい。」

「僕……、学校にゆきたくないんだ。」

コペル君は、④まるで怒(おこ)っているように、もう一度そういいました。

「だって、病気もそろそろ全快だし、試験だって、もうじきじゃないか。」

「それでも、なんでも、僕、いやなんだ。」

「なぜさ。」

「だって、僕……」

コペル君は、また、言葉がつまりました。

「おかしいじゃないか。君はいつも……」

「ううん。」

と、コペル君は強く首を振って、叔父さんの言葉を押さえました。

「叔父さん、僕ね……」

そういいかけたとき、急に眼が熱くなって来たと思うと、たちまち涙があふれて来ました。Ⓑむせびそうになるのを耐えながら、コペル君はいいました。

「とても、――とても済まないこと、しちまったんだ。」

「……」

叔父さんは、上半身を起こして、まじまじとコペル君をみつめました。仰向いているコペル君の眼から、涙がこぼれて、一筋、耳の方へたらたらと流れてゆきました。

「どうしたのさ、いったい。」

叔父さんは、静かな声でいいました。

「叔父さんに、話してくれないか。」

コペル君が涙の中から、じっと天井を見つめたまま答えないのを見ると、叔父さんは重ねていいました。

「さ、どんなことでもいい。叔父さんに、みんないってしまいたまえ。」

――コペル君は、つっかえつっかえ、正月に水谷君のうちでみんなが約束したこと、雪の日のあの出来事、三人がもう自分を見捨ててしまったことを、叔父さんに話しました。話してゆくうちに、コペル君は、胸の中につかえていたものが、ようやく流れ出してゆくのを感じました。そして、おわりの頃には、割合にスラスラと口がきけるようになりました。

「叔父さん。僕、ほんとに悪かったと思ってるの。北見君たちが、僕のこと怒ったって、仕方がないと思ってるの。僕、卑怯なことしてしまったんだもの。卑怯なことを――」

そういってしまうと、コペル君は、肩から重荷がおりたような気持がしました。

「そうか、――そんなことがあったのか。」

と、⑤叔父さんも何かホッとしたような調子でいいました。

「で、コペル君、君はどうしようと思うの。」

「僕、どうしたらいいかわからないんだ。ただ、北見君なんかに、わかってもらいたいの。」

「何を？」

「何をッて――。僕のしたこと、そりゃ悪いさ。でも、僕、それをほんとに済まなかったと思ってるの。僕、いまだって、いまだって、そのこと考えると©たまらないんだよ。」

「うん。」

「それにね、叔父さん。僕、言訳じゃないけど、何度も黒川の前に出ていこうと思ったんだよ。」

「……」

「ほんとだよ、叔父さん。ほんとに僕、出ていこうと思ったんだ。そう思ったことは思ったんだけど、僕、思い切って飛び出せないで、ぐずぐずしてるうちに、北見君がやられちゃったの。――僕、弱虫だったからいけなかったけど、北見君のこと、とても心配していたんだ。平気で見ていたんじゃないんだよ。僕、それだけはわかってもらいたいの。」

「うん、もっともだ。」

と、叔父さんが同感してくれました。

「僕、どうしたらいいんだろう。」

すると、叔父さんは、コペル君に元気をつけるように、晴々と答えました。

「そんなこと――、そんなこと、何も考えるまでもないじゃないか。いま、すぐ手紙を書きたまえ。手紙を書いて、北見君にあやまってしまうんだ。いつまでも、それを心の中に持ち越してるもんじゃないよ。」

しかし、コペル君は、まだ何かためらっていました。

「でも、叔父さん、そうすれば北見君たちは、機嫌を直してくれるかしら――」

「それは、わからないさ。」

「じゃあ、僕、いやだ。」

そういうと、叔父さんが、急にキッとした顔になりました。

「潤一君！」

叔父さんは、もうコペル君と呼ぶのをやめて、まじめに話しかけました。

「そんな考え方をするのは、間違ってるぜ。――君は、友だち同志の堅い約束を破ってしまったんじゃないか。黒川のゲンコツがこわくって、とうとう北見君たちといっしょになれなかったんじゃないか。そして、自分でも悪かったと思い、北見君たちが怒るのも仕方がないといっている。それだのに、なぜ、そんなことをいうんだい。なぜ、男らしく、自分のしたことに対し、どこまでも責任を負おうとしないんだい。」

コペル君は、鞭でピシピシと打たれているような気持でした。叔父さんは、構わずはげしい調子でつづけました。

「北見君や水谷君から絶交されたって、君には文句いえないんだぜ。ひとことだって、君からはいうことはないはずだぜ。」

コペル君は、⑥眼をギュッとつぶって、切なそうな顔をしました。

「そりゃ、仲のよかった友だちと、こんなことから別れてしまうのはつらいさ。」

と、叔父さんは静かな調子に戻っていいました。

「北見君たちに仲直りしてもらいたいッて気持は、叔父さんだってわかるよ。でもね、コペル君、いま君はそんなことを考えていちゃいけないんだ。いま君がしなければならないことは、何よりも先に、まず北見君たちに男らしくあやまることだ。済ま

ないと思っている君の気持を、そのまま正直に北見君たちに伝えることだ。その結果がどうなるか、それは、いまは考えちゃあいけない。君が素直に自分の過ちを認めれば、北見君たちは機嫌を直して、元通り君と友だちになってくれるかも知れない。あるいは、やっぱり憤慨したまま、君と絶交しつづけるかも知れない。それは、ここでいくら考えて見たってわかりゃしないんだ。しかし、たとえ絶交されたって、君としては文句はいえないんだろう。だから――、だからね、コペル君、ここは勇気を出さなけりゃいけないんだよ。どんなにつらいことでも、自分のした事から生じた結果なら、男らしく堪え忍ぶ覚悟をしなくっちゃいけないんだよ。考えてごらん、君がこんどやった失敗だって、そういう覚悟が出来ていなかったからだろう？　一たん約束した以上、どんな事になっても、それを守るという勇気が欠けていたからだろう？」

コペル君は、⑦眼をつぶったまま、黙ってうなずきました。

「⑧また過ちを重ねちゃあいけない。コペル君、勇気を出して、ほかのことは考えないで、いま君のすべきことをするんだ。過去のことは、もう何としても動かすことは出来ない。それよりか、現在のことを考えるんだ。いま、君としてしなければならないことを、男らしくやってゆくんだ。⑨こんなことで――コペル君、⑩こんなことでへたばっちまっちゃあダメだよ。さ、元気を出して、北見君たちに手紙を書きたまえ。正直に君の気持を書いて、北見君たちに許しを乞いたまえ。そうすれば、君はサバサバした気持になれるんだ。」

コペル君は、黙って叔父さんの言葉を聞いていましたが、このとき涙で濡れた眼を見開くと、叔父さんの顔を見ずに、宙を見つめたまま、しっかりと言いました。

「叔父さん！　僕、書きます。」

そして、思いつめたように、こうつづけました――

「もし、北見君たちが許してくれなかったら、僕、許してくれるまで、――許してくれるまで、きっと待ちます。」

その日の午後、コペル君は長い間かかって、北見君へ手紙を書きました。

北見君。

僕は、君が黒川の仲間につかまって、あんな目にあったとき、その場にいながら、だまって見ていました。水谷君と浦川君とが、ちっとも逃げかくれしないで、君と同じ目にあったのを見ていながら、やっぱり僕は出てゆきませんでした。

僕は、なぐられるならいっしょにと、指切りしたのを、忘れてしまったのではありません。

僕は、あのことを、ちゃんと覚えていたのです。それだのに、僕は約束を守りませんでした。僕がしたことは、ほんとに、ほんとにいくじがなかったと思います。

僕は君に、なんといってあやまったらいいのかわかりません。君にも、水谷君にも、浦川君にも、すまないことをしてしまったと、僕、どのくらいくやしいか知れません。あのことを思い出すと、胸がいっぱいです。

僕は、卑怯者といわれても、臆病者といわれても、なんといわれても仕方がない人間だと思いました。

君たちからケイベツされても、君たちから絶交されても、僕にはなんにも言う資格がありません。

ただ、僕は、自分のしたことを、悪かったと思い、残念で残念でたまらない気持でいます。死んだ方がましだとさえ思いました。僕が本当に悪かったと思っていることだけは、どうかわかって下さい。

僕、勇気がなくって、とうとう出てゆかないでしまったけれど、君たちのこと、どうでもいいと思ったことは、一秒だってありません。

それは、今でも同じです。僕は、いつか、自分のこの心を、君たちにわかってもらえるようになりたいと考えています。

⑪それだけのことを、きっとするつもりでいます。こんどこそ、僕も、必ず勇気を出して見せます。

出来ることなら、それを信じて下さい。

信じてくれたら、僕、どんなにうれしいでしょう。

三月×日

北見恒太君

この手紙は、水谷君と浦川君にも見せて下さい。

手紙を書いてしまうと、コペル君は女中(※1)を呼んで、それをすぐに出しにやりました。それから、書きそこなった書翰箋(※2)を細かくちぎって屑籠に入れ、枕もとを片づけてから、床の上に横になりました。すると、疲れとも安心ともつかない気持が、深い溜息になって出て来ました。コペル君は、張りつめていたものが一時にゆるんで来るのを感じ、ぐったりとして眼をとじました。

⑫「それでよし。それでよし。」

どこからともなく、そんな声が微かに聞えて来るような気がします。

コペル君は、もうなんにも考えませんでした。ただ、その遠い微かな声を聞きとろうとしながら、からだ中をひたして来る眠気に、いつかウトウトと誘いこまれてゆきました……

語注　※1「女中」――　他人の家で家事の手伝いをして働く人。

※2「書翰箋」――　便せんのこと。

問一　二重傍線部Ⓐ「現金に」（2行目）、Ⓑ「むせびそうになる」（58行目）、Ⓒ「たまらない」（81行目）の文中における意味として最も適当なものをそれぞれア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

Ⓐ「現金に」

ア．目の前にあるものを信頼（しんらい）して
イ．目先の利益によって態度を変えて
ウ．相手の弱みにつけこんで
エ．何事もなかったかのようにして

Ⓑ「むせびそうになる」

ア．涙で視界がぼやけそうになる
イ．やけになって呼吸が乱れそうになる
ウ．悲しくてさけびそうになる
エ．涙で息がつまりそうになる

Ⓒ「たまらない」

ア．言葉にすることができない
イ．はずかしくていやになる
ウ．つらくてがまんができない
エ．想定外のことに冷静でいられない

問二　本文８行目に傍線部①「心配そうに眉をひそめ、なぜかとたずねたいのを我慢して、そっと立ってゆくのでした」とありますが、このときの「お母さん」の思いはどのようなものですか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

ア．多感な思春期の息子が、親に相談できない悩(なや)みを抱(かか)え、一人になりたいという思いでいることは承知しつつも、それでもその悩みを親として聞きたいという思い。

イ．普段(ふだん)の病気のときとは様子が違うことが気がかりだが、息子(むすこ)が自分から話さない以上、親から強(し)いて事情を聞くのはこらえて、今は一人にしておこうという思い。

ウ．いつもの病気のときと違って親に対して冷淡(れいたん)な態度を取る息子の様子に、困惑(こんわく)と怒(いか)りを覚えながらも、素直に何でも話してくれるようになるのを待とうという思い。

エ．一人になりたい息子の気持ちを尊重しようとするものの、普段の病気のときよりつらそうな息子の様子が心配で、元気になるならどんなことでもしてあげたいという思い。

問三　本文10行目に傍線部②「お母さんに背中を向けたまま、ポロポロと涙をこぼしました」とありますが、このときの「コペル君」の気持ちはどのようなものだと考えられますか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

ア．お母さんが自分のことを心配してくれているのは分かるが、元気を出せない理由を打ち明けることもできず、自分の言動を思い返し、とりかえしがつかないという罪悪感を抱え、一人で悩み苦しむ気持ち。

イ．お母さんに余計な心配をかけていることを申し訳なく思うが、素直に話せない事情も分かってもらえず悲しみがつのり、まるでお父さんがなくなったときのように一人で寂しくてやりきれない気持ち。

ウ．お母さんに心配をかけている自分が情けないが、もっと忍耐（にんたい）強くたずねてくれていたら打ち明けられたのにと歯がゆく感じ、わかってもらうためにはどうしたらよいかもわからずもどかしい気持ち。

エ．お母さんが気を引き立てようとしていろいろ話しかけなければ、元気を出せない理由を話せたのにと腹を立てつつも、今さらどうにもできないことへの後悔が押し寄せ自分のことが許せないでいる気持ち。

問四　本文25行目に傍線部③「コペル君の心はやっぱり迷わずにいられないのでした」とありますが、ここからうかがえる「コペル君」の気持ちはどのようなものですか。説明しなさい。

問五　本文48行目に傍線部④「まるで怒っているように」とありますが、ここから「コペル君」のどのような様子が読み取れますか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

ア．学校に行きたいと思えない日々が続き、その原因は自らの行動にあったと思いつめて自分を責めてしまうと同時に、自分を支えてくれる叔父さんにまでいらだっている様子。

イ．叔父さんに学校に行けない理由を打ち明けようと試みたが、「学校にゆきたくない」という言葉を繰(く)り返すことしかできず、強がっていることを隠しきれなくなっている様子。

ウ．学校に行きたくないと口に出せずに一人で悩んできて、ようやく叔父さんには話し始めたものの、うまく話せないもどかしさから語気をつい荒(あら)らげてしまっている様子。

エ．学校に行きたくない理由を叔父さんに言おうとやっと決心がつき、詳(くわ)しく説明する勇気をもてたので、語調をあえて強くし、必死に言葉をしぼりだそうとしている様子。

問六　本文76行目に傍線部⑤「叔父さんも何かホッとしたような調子でいいました」とありますが、それはなぜですか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

ア・コペル君が学校に行きたくないほど悩み苦しんでいた理由が等身大のものであり、彼自身がくやんでいる様子からも状況はよくなりそうだと感じて安心できたから。

イ・コペル君が学校に行きたくないほど悩んでいた理由が本当に些細なことだとわかり、もうすでに反省をし自分自身でほぼ解決していることに感心しているから。

ウ・コペル君が病気になるほど苦しんでいた理由を話してくれたが、それが本当に中学生らしいものであり、コペル君が悪くないことを知って心が落ち着いたから。

エ・コペル君が話しにくそうにしていた理由が特別やっかいではなく、ありきたりのものであったので、叔父自身が解決することができるとわかって気持ちが晴れたから。

問七　本文107行目に傍線部⑥「眼をギュッとつぶって、切なそうな顔をしました」とありますが、このときの「コペル君」はどのような気持ちですか。そうなった理由もふまえて説明しなさい。

問八　本文119行目に傍線部⑦「眼をつぶったまま、黙ってうなずきました」とありますが、このときの「コペル君」はどのような気持ちですか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

ア．叔父さんの話がまだ続きそうなので、とりあえず納得（なっとく）して聞く気持ち。
イ．叔父さんの言っていることに間違いはなく、心を入れ替（か）えようと決心する気持ち。
ウ．叔父さんの言っていることの細部が気にかかるが、大筋では賛成する気持ち。
エ．叔父さんの言っていることが正しいと思い、それを受け入れようとする気持ち。

問九　本文120行目に傍線部⑧「また過ちを重ねちゃあいけない」とありますが、どういうことですか。「また」という言葉に注意して、説明しなさい。

問十　本文122行目に傍線部⑨・⑩「こんなことで」とありますが、ここでは同じ言葉が二度繰り返されています。この部分では「叔父さん」のどのような思いが強調されていますか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

ア．コペル君が自分の思いを友だちに伝えないことが過ちだと気付かせ、結果がどうなるにせよ許してくれるまで待つ大切さを語りかけることで、コペル君が自ら考えを改めるように促す叔父さんの配慮。

イ．コペル君が友だちを裏切ったことは、大人からすれば大したことのない出来事だと示し、きちんと謝ることで元の仲良い関係に戻ることができるのだと、コペル君に伝えたいという叔父さんの熱意。

ウ．コペル君が友だちに見はなされたくないという、ちっぽけでくだらない自分の甘えや弱さにからめ取られずに、過去と正面から向き合い、友だちに謝罪する勇気をもってほしいという叔父さんの励まし。

エ．コペル君が感じている、友だちに許されなかったらどうしようという不安を取り去り、きちんと謝るべきだと主張することで、些細なことにこだわらず正しく生きることが大切だという叔父さんの信念。

問十一　本文149行目に傍線部⑪「それだけのことを、きっとするつもりでいます」とありますが、これはどういうことですか。本文をふまえて説明しなさい。

問十二　本文160行目に傍線部⑫『それでよし。それでよし。』どこからともなく、そんな声が微かに聞えて来るような気がします」とありますが、これは「コペル君」のどのような気持ちを表していると考えられますか。「それでよし、それでよし」という声がどのようなものかをふまえたうえで、くわしく説明しなさい。

【二】　次の傍線部①～⑩のカタカナを漢字に直して丁寧（ていねい）に書きなさい。

・両者の伝えたいメッセージは同工①イキョクだ。
・私の帰りを待つ父の②キョウチュウはいかばかりであろうか。
・久しぶりに晴れたので、近くの公園を③サンサクする。
・どれほど苦しくとも、④ジンギにはずれることはするまい。
・買い物のときは、商品の⑤ネフダをきちんと見よう。
・観察を終えたので、つかまえた虫を野に⑥ハナつ。
・あせることはない。「⑦カホウは寝て待て。」と言うではないか。
・⑧バンシュンになり、川の水もようやくあたたかくなってきた。
・ＡＩ技術の⑨カクシンにはおどろくばかりだ。
・ベンチャー企業（きぎょう）が成長し、上場のために⑩カブケンを発行する。

（ 解 答 ） 漢 字 の 読 み 書 き

【一】

問一 Ⓐ　　Ⓑ　　Ⓒ　　問二　　問三

問四

問五　　問六

問七

問八

問九

問十

問十一

問十二

【二】

①		②		③		④		⑤	
⑥	つ	⑦		⑧		⑨		⑩	

※評点	

受験番号		氏名	